

平成 25 年度内閣府日韓国青年親善交流 参加レポート

とみざわ はるひさ
富澤 明久

（ 渋谷ユネスコ協会
目黒ユネスコ協会 ）



1. 主な活動

場 所	大韓民国
期 間	平成 25 年 9 月 3 日から 17 日まで
動 機	私の祖父が第二次世界大戦で朝鮮に住んでおり、幼いころから朝鮮半島の話聞いて、興味がありました。そして、もし韓国に行くなら、国家という視点で日韓関係を見てみたいと思いこの事業を応募しました。今回、応募のために、日本ユネスコ協会連盟から推薦を受けて書類選考を通過することができました。
内 容	この事業では、日本と韓国の青年による交流を通して相互理解と友好を深め、広い国際的視野と国際協調の精神を養う機会を提供し、国際化の進む社会の様々な分野で活躍できる青年の育成を目指す日本の内閣府、大韓民国の女性家族部の両政府が共同で実施しています。私は平成 25 年度日本・韓国青年親善交流事業の韓国派遣団員として、9 月 3 日から 17 日の期間、大韓民国を訪問しました。韓国訪問中、現地青年との社会事情に関するディスカッション、文化・スポーツ交流、福祉・産業などの各種施設の訪問、ホームステイなどを行いました。

2. 主な活動から広がった関連活動

「日韓青年親善交流のつどい」という、日本と韓国の両政府が共同で実施する韓国青年と日本青年の交流プログラムに日本代表青年として参加しました。このプログラムは日韓両国の青年が寝食を共にしながら、ディスカッションや文化交流などを通じ相互理解を深める 2 泊 3 日の合宿型プログラムです。

3. 今回、チャレンジする準備段階で大変だったこと、工夫したこと

韓国語があまりできなかつたので、語学力に関して不安はありました。派遣が決まってから、韓国に訪問するまで、同じ韓国語があまりできない団員と一緒に勉強会を開き、不安を払拭しようと励み、滞在中語学力のある団員に聞き取れなかつたところを補ってもらっていました。

4. 実際の活動で感じたこと

現地の青年と交流する際、テレビや新聞で報道されているように日本人に対して、あまりよくないイメージや反日感情があるのではないかと不安があったのですが、実際に話をしてみるとそういうことはなく、皆明るく元気で、私に対して、温かく思いやりのある青年ばかりでした。確かに探せば、日本人に対して考悪いイメージを持っている人もいることは確かです。しかし、わざわざ訪韓した日本人に対して敵対心を持つことは絶対に思わないそうです。改めて人と人が直接交流することは大事だと思いました。

5. 活動のなかで出会った人から言われたことで、心に残ったこと

日本派遣団の団長が、韓国の女性家族部を表敬訪問した際に、これからの日韓関係について、「近くて遠い国」から「近くて近い国」にしていきたいとおっしゃった。その言葉を聞いて、女性家族部の職員らが大きくなずいた姿に私は感動しました。これからの日韓関係を担うのは私のような青年世代です。互いに分かり合おうとする気持ちが人と人をつなぎ、ひいては国際理解につながるのだと学びました。

6. 活動のなかで、自分を活かしたこと、活かせなかったこと

私の専攻する神道について説明しました。韓国では様々な宗教があり、日韓の宗教性について違いなど多く学びました。しかし、語学の力が足りなかったことと他の宗教の理解が乏しかったことも影響し、説明不十分な部分も多々あったので、悔しい思いをしたと同時に、それが今勉強する上でモチベーションとなっています。

7. 活動を通じて関心が深まったこと

韓国で文化紹介をする機会がありました。日本青年でソーラン節を紹介した際、その瞬間、日本のことを紹介するという国際交流をしているのだと肌で実感しました。これはグローバル化して均一になりつつある時代に、文化紹介は伝統を継承することにつながる一つのツールだと思いました。この派遣で文化交流に対する心持ちが大きく変わりました。私はユネスコ協会の会員として、日本文化について見聞を深め、自国のより良い文化を韓国に伝え、自分が触れて素晴らしいと思えた韓国の文化を広めていきたいと思いました。そうすることでユネスコの理念として掲げている平和の砦につながると確信しています。

